

大陸文物の受容と型式的変化をめぐる考察

石橋茂登

はじめに

土器の形態や文様の変遷には、形の長大化や技法の簡素化、文様の範辱化、くずれといった自律的变化が生じる。それだけではなく、他からの影響をうけて生じる変化がある。形態の模倣、文様のとりこみといった現象である。

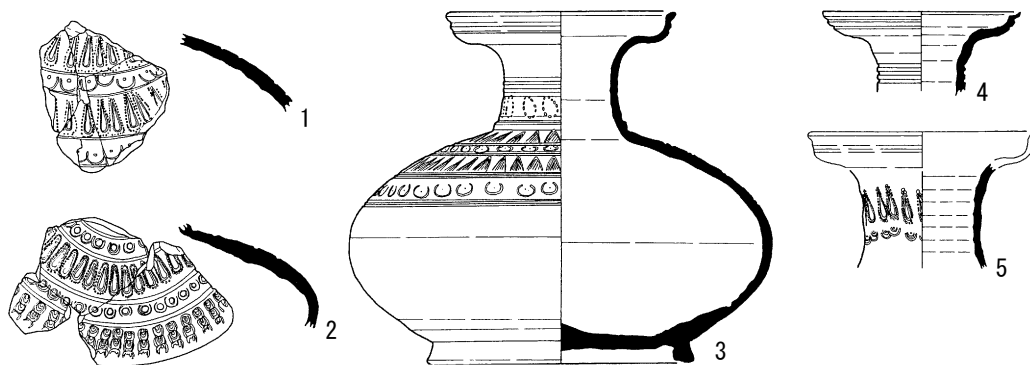
飛鳥時代、みやこが置かれた飛鳥・藤原地域からは外国産の土器がしばしば出土する。その総量は決して多いとはいえないが、対外交流の中核であった飛鳥・藤原ではそれなりの出土量がある。遣隋使、遣唐使の派遣や外国使節の往来をはじめとして、さまざまな機会に運ばれてきたものであろう。

筆者は展覧会の仕事（飛鳥資料館 2013）を通じて近時親しくそのような外国産の土器を観察する機会を得た。一方で、筆者がテーマとしているのは弥生時代であり、特に銅鐸を中心として青銅器を研究してきた。一見何の関係もなさそうな飛鳥時代の土器と、弥生時代の青銅器だが、そこには日本列島における大陸文物の受容、あるいは、それから影響を受けて国産品が変化する現象としての共通性がある。またその背後にある外交関係の変化であるとか、異文化からの受容の仕方といったことを知る手がかりがある。そこで本稿では、朝鮮半島の土器から説き起こして弥生青銅器をめぐって思うところを書き記してみよう。

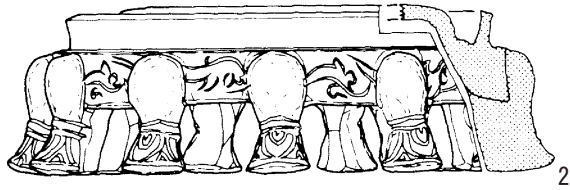
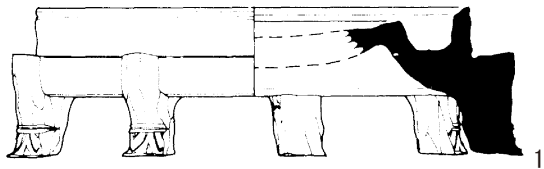
1. 飛鳥・藤原地域の外国産土器

飛鳥・藤原地域では朝鮮半島産の陶質土器・陶器、鉛釉陶器、中国産の三彩陶器がみられる（森川 2013）。その一部を第1～3図で示す。陶質土器は須恵質のやきもので、日本の須恵器の原型とされる。飛鳥・藤原地域では新羅産のもの（新羅土器）が主を占める。鉛釉陶器には緑釉・褐釉の単彩と多彩釉がある。その技術は朝鮮半島にももたらされ、新羅土器と同様の装飾をもつ鉛釉陶器が生産された。日本出土の鉛釉陶器には中国産と朝鮮半島産の両方がある。

飛鳥・藤原地域での新羅土器・緑釉陶器は、寺院や官衙、居館的な施設と考えられる諸遺跡と、藤原宮・京で出土している（安田 2002）。豊浦寺の緑釉細頸壺（第1図1）、藤原宮跡出土の新羅土器（第1図2）、石神遺跡の細頸壺（第1図3～5）のように、水滴文、半円点文といった特徴的な文様と形態から確実に新羅製と考えられるものが知られている。また、石神遺跡出土の獣脚硯（第2



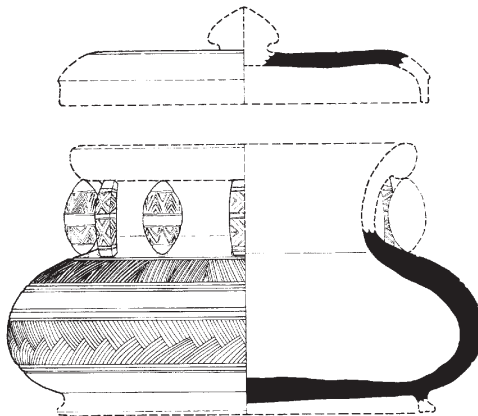
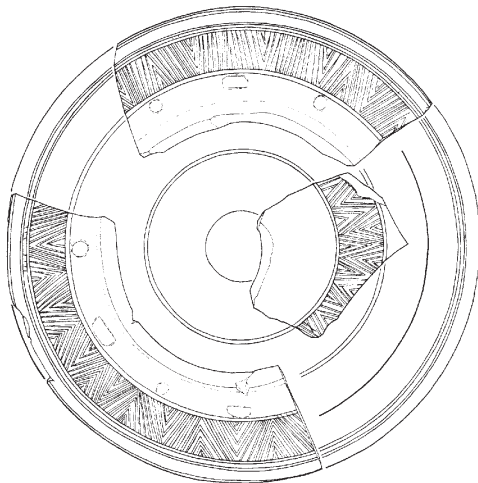
第1図 新羅土器 (S=1/3)



第2図 獸脚硯 (S=1/3)

1 石神遺跡出土獸脚硯

2 藤原京左京六条三坊出土緑釉獸脚硯



第3図 鉛釉陶器 (S=1/3) 飛鳥池遺跡

図1)は新羅産、国産とみる見解もあるが、獸脚の特徴から百濟産とされる(千田1995)。これらは朝鮮半島から舶載されてきた遺物と考えて良い。それに対し、舶載品の意匠を取り入れたり影響を受けたりした国産品もみられる。藤原京左京六条三坊出土の緑釉獸脚硯(第2図2)は獸脚の文様が第2図1の硯と似る。しかし硯部側面の忍冬唐草文は半島に例がないとされ、その一方で藤原宮所用軒平瓦の忍冬唐草文と似ることから、百濟系の意匠を取り入れた国産の硯とする見解(西口2012)が有力とされる。飛鳥池遺跡出土の鉛釉陶器(第3図)は、白色のスリットのみで緑釉はほとんどみられず、失敗品の廃棄とされる。飛鳥池遺跡の工房で緑釉陶器生産の萌芽があったことを示す資料である。南北朝の金属製唾壺に似た扁平な体部と複合三角文、頸部に貼り付けた痕跡がのこる長方形板と尖楕円形部品といった異例な形状から、隋唐の意匠の影響が指摘されている(西口2012)。

飛鳥時代、中国産の三彩はきわめて少ない。藤原京右京五条四坊・下ツ道東側溝出土の滴足円面硯、同右京二条三坊東南坪出土の三彩俑片があるが、坂田寺跡出土の短頸壺と陶枕は奈良時代の唐三彩とみられている(玉田2012)。また山田寺跡出土の三彩に北齊三彩の可能性を指摘する意見もあるが(朝日新聞2013)、従来通り国産と考える見解が支配的である。

朝鮮半島産土器類の出土量と中国産とを比較すると、飛鳥時代には朝鮮半島産のものが比較的多く見られて中国産がほとんどないのに対し、次の奈良時代になると中国産が多く朝鮮半島産は少なくなる逆転現象が指摘されている。これは中国・朝鮮半島との往来頻度を反映した現象であろう。

推古朝で厩戸皇子が主導したのは推古10年(602)と翌年の新羅派兵計画、遣隋使や隋使来日といった隋との往来にみられる、積極的外交である。推古18年(610)の新羅・任那使の来日以後、厩戸皇子と入れ替わるように外交の舞台に出てきた蘇我馬子は、むしろ受動的な外交で朝鮮半島からの文化の受容を主とし、外国使節の通るルートの違いも主導者の違いの反映だと指摘されている(近江2012)。推古31年(623)には新羅使とともに唐から帰国した恵日らが唐との往来を進言したが、

馬子存命中に唐外交が始まった形跡はない。

また、遣唐使の航路を整理した上田雄（2006）の成果を参照すると、7世紀代の遣隋使・遣唐使は基本的に朝鮮半島沿岸の北路をとり、大宝2年（702）の遣唐使以後、博多から東シナ海を横断して直接大陸へゆく南路に代わっている。つまり飛鳥時代は寄港地の必要性など航路上からも朝鮮半島と濃厚な関係があり、奈良時代になると朝鮮半島を経ずに唐と直接往来するようになった。そのような情勢が考古資料の出土量とも対応するといえよう。8世紀前半に南島路の存在を想定する説もあるが、朝鮮半島を経由しなくなる点は同じである。

これらから考えると、往来頻度の高い地域の文物は搬入される量も多いこと、外国産の貴重な文物は国産品の意匠に影響を与える場合があること、政治的な情勢で相手地域や頻度が変化すれば考古資料に反映されることを看取できる。

2. 弥生青銅器にみる朝鮮半島の影響

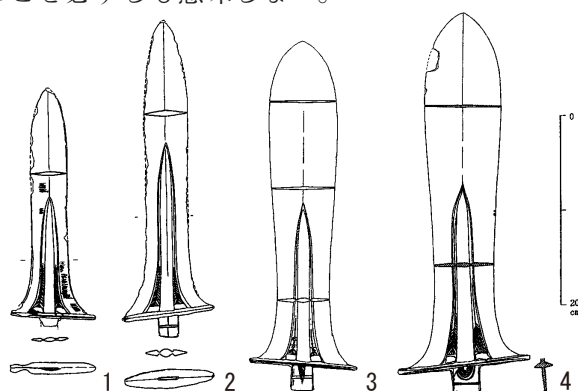
飛鳥時代を材料として考えたことを念頭に、本題である弥生時代について考えてみよう。

弥生時代には中国大陸との直接の往来はほとんどなかったと考えられる。終末期の卑弥呼の遣使にしても朝鮮半島におかれた帯方郡を経由してのことである。

朝鮮半島においては漢の地方支配組織である楽浪郡、のち帯方郡もおかれたことから、上流階級を中心として漢文化の流入が直接的に行われた。しかし楽浪郡・帯方郡の文化は漢と同一ではなく、朝鮮半島の在地文化の影響を受けていることが考古遺物からも指摘されている（谷 1995）。倭も楽浪郡や帯方郡を経由している以上、漢の文物を受容する際にも韓の文化がフィルターのように影響をあたえたことが考えられる。

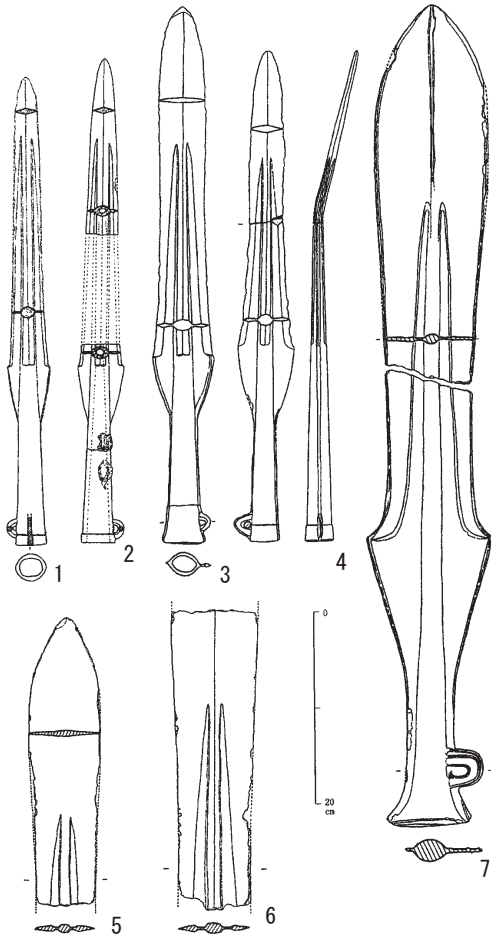
弥生時代終末から古墳時代の初頭、文献上から知られる倭女王卑弥呼が景初三年（239）に帯方郡を通じて魏に遣使するのは公孫氏滅亡（238）の直後であり、それ以前は公孫氏（楽浪郡・帯方郡）と倭のやりとりは正史に記録されていない。しかし楽浪郡・帯方郡と韓との交流もほとんど記録がないが、考古学上からは同時期にも活発な交流があったことが知られている（高久 2011）。公孫氏は独立の動きを見せるなど政権に従順ではなかったため、その支配下の郡へ倭・韓が朝貢していたとしても魏の正史には記載したくない事柄だった可能性や、公孫氏滅亡の過程で記録が欠失した可能性なども考えられ、記録がないことは交流がないことを必ずしも意味しない。

また、卑弥呼、つぎの台与ともに頻繁に魏・晋へ遣使している（田中 2011）が、多くの場合使者は帯方郡までであり、魏の都へ訪問したことが明らかなのは景初三年のみである。つまり現実的には朝鮮半島までの遣使であり、ほとんど中国大陸の内陸まで到達していない。そういう意味では倭と魏・晋の中枢との交流ではなく、基本的に倭と帯方郡の交流であり、朝鮮半島との往来の枠を超越するものではない。『後漢書』倭伝の建武中元2年（57）の奴国王、永初元年（107）の倭国王師升は具体的にどこまで到達したかわからないが、『漢書』地理志の「夫れ楽浪の海中に倭人あり。（略）歳時を以て来たり献見



第4図 朝鮮半島出土の倭製武器形青銅器（中細形・中広形銅戈）（S=1/8）

1：龍田里1号 2：龍田里2号 3：飛山洞 4：晩村洞



第5図 朝鮮半島出土の倭製武器形青銅器（中細形・中広形・広形銅矛）(S=1/8)

- 1: 新川洞B号 2: 九政洞B号 3: 飛山洞3号
 4: 龍田里 5: 良洞里採集 6: 良洞里90号墓
 7: 良洞里200号墓

すと云う」とあるのも、楽浪への献見を伝聞として記録したにすぎない。

楽浪の墳墓をV期区分して三韓との関係を論じた高久健二（1995,2002）によると、楽浪郡と原三国はII期（前1世紀中葉～後葉）とV期（2世紀後葉～3世紀中葉）に密接な交流をしていた。楽浪への朝貢によって得たとみられる三韓の墳墓に副葬された漢式遺物は、上位階層同士の交渉によって漢式遺物が個別的に伝播したために、本来の使い方や意味と切り離されて、威信材としての性格が強い。それに対して非漢式遺物は下位階層の墳墓に濃厚であり、交易などでもたらされたために体系的な文化として伝播しているという。

この楽浪と韓の関係は、楽浪郡・帯方郡と倭、あるいは韓と倭の関係においても類似した状況を考えることができる。弥生時代中期の北部九州にはじまり、古墳時代前期に全国的に見られる銅鏡の多量副葬は、中国での本来の使い方から逸脱した独特な使用法である。韓は基本的に銅鏡を副葬しない地域である（高倉2002）。倭で多数副葬される漢鏡は半島経由でもたらされるので、朝鮮半島南部地域は銅鏡の存在を知りつつ、それを多数副葬するような儀礼を行わなかったとみなされる。倭から楽浪郡・帯方郡への朝貢によって漢式遺物が体系的ではない伝播をした結果、銅鏡が本来の用途や意味から変質して受容されたといえよう。

このような事例はほかにもある。町田章が明らかにしたように（町田1988）、伊都国王とされる三雲南小路遺跡の甕棺に副葬された金銅製四葉座金具は、本来は王侯の

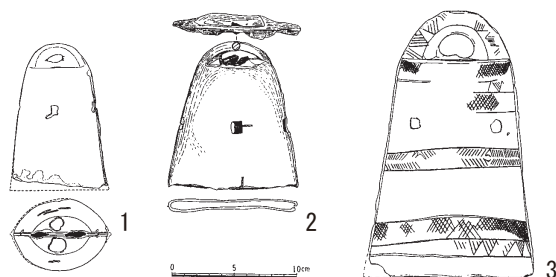
死に際し皇帝から下賜される木棺の飾金具である。その本来の意味を失って、甕棺の中に宝器として副葬された。山口県地蔵堂遺跡出土の馬車の蓋弓帽も、同様に本来の脈絡を失った文物の事例である。

朝鮮式の青銅器である銅矛、銅戈、銅劍、小銅鐸が日本列島内で独特な発展をするのも同様に捉えることができる。北部九州はともかく、それ以外の地域では青銅器を用いた祭祀が体系的に導入されずに、個別的に切り離されて威信財として持ち込まれた結果、大型化や埋納儀礼といった本来の使い方（朝鮮半島での使い方）を逸脱した使い方をされるようになる。

朝鮮無文土器文化の青銅器副葬の構成からは、異形青銅器、多鈕鏡、青銅武器の順でランクがあるとされる（宮里2010）。それらすべてが北部九州にもたらされたわけではなく、一番ランクの高い異形青銅器はみられない。弥生社会側の取捨選択というより、むしろ供給側が提供する器種を下位に限定した可能性もあろう。

その一方、倭では青銅器に矛、戈、劍の序列があり、その移出先が規制されていることが明らかにされている（下条1982）が、最高の祭器とされる銅矛であっても朝鮮半島に運ばれ、副葬されている。後藤直（2009）の整理では確実な倭製である中細形から広形の銅矛、銅戈計18口をはじめ、細形銅矛も含め相当な量の倭製青銅武器・武器形青銅器が韓の地に副葬されているという。朝鮮半

島において青銅武器は祭器化するなかで装飾化という変化をするが、日本では装飾化ではなく大型化という変化を遂げている。これは小銅鐸が銅鐸へ変化するのも同じ方向性の変化として理解できる。使用方も、倭の青銅武器は祭器化して副葬品、さらに埋納品へと変化することが知られている。それに対して朝鮮半島では武器形青銅器は一貫して副葬品であり、大量に埋納したりはしない。明らかに使用法が異なっていて、搬入された倭製青銅器も倭での使い方（倭製にとっては本来の使い方）ではなく韓の使い方に供されている。



第6図 朝鮮半島と日本の小銅鐸・銅鐸 (S=1/6)
1: 韓国入室里 2: 大分県別府 3: 島根県荒神谷

つまり朝鮮半島の青銅器は、日本に受容される過程で器種の脱落、使い方・形態変化の相違が起こる。逆方向では物品だけ受け入れられ、使い方は受け入れられない。対馬だけは埋納専用品と化したはずの広形銅矛を、埋納にも副葬にも用いている点で特異である。倭・韓双方の使い方を受容していたか、古い副葬習俗の残存であろうか。

また後藤によれば朝鮮半島で倭製青銅器が副葬されているのは各時期の最高位を含む高位の墓であり、弥生時代中期後半から後期前半までに北部九州で最高位の武器が韓に移出されている。このことは、北部九州の首長が韓との交渉を重視し、最高位の儀器を送るべき重要な相手とみなしていることを示し、倭から韓への良好な関係を維持するための贈り物であることが読み解かれている。

筆者は主に銅鐸を考察する中で、銅鐸の移動は地域間関係を示すものであり、政治的な贈り物だという理解をしている。集団間のネットワークを構築し維持するにあたり、それを視覚化する象徴的な器物だったのであろう。その点、武器形青銅器に関する後藤の見解は妥当と考える。

倭人にとって青銅鏡は漢の権威を代弁するものであり、韓よりさらに上位に置かれたと考えることができよう。日本にもたらされた青銅鏡の増減は、楽浪の動きと連動しており、銅鏡の増減から対外交渉主導権が北部九州から畿内へ移動したことも読み解かれている（岡村 1993・1995）。先学の成果を参考にすれば、楽浪郡の成立（前 108 年）を契機として漢との流通の変革があり、朝鮮半島を経由して倭の首長達は鉄器や金属素材を入手していたと考えられる。それは単独の首長で実施できることではなく、首長の連合によって実施されたのであろう。畿内の首長集団が北部九州と連合したのか、独自の日本海側や瀬戸内ルートを利用したのかは検討が必要だが、ともかく半島を介して漢の文物を入手することが日本列島の社会構造や物質文化に一大変化を引き起こしたことは明らかである。

朝鮮半島の武器形青銅器の検討からは、銅鐸に関するいくつかの重要な手がかりも得られる。一部考察を交えながらまとめると、次のようになろう。

倭は韓および楽浪郡・帯方郡、そこを通じた漢との交渉によって漢鏡や鉄器などを得るために、韓社会との良好な関係を維持する必要があった。韓の地に倭製の祭器化した武器形青銅器が多数持ち込まれており、それは倭のやりかた（埋納）ではなく韓のやりかた（副葬）で消費されている。つまり倭製青銅器の使い方は、倭ではなく韓が決めている。そのことから、武器形青銅器はつながりを示すために倭が押しついたり下賜したりするものではなく、良好な関係を期待して倭の首長層が韓の首長層に贈ったものという理解が妥当である。最高位の墓に副葬されていることから、それが高度な政治的行動であったことも看取される。朝鮮半島出土の倭製青銅器から導かれた青銅祭器の性格は、ひるがえって日本列島内における青銅祭器の分布の意味を考える上でも重要な指針となる。

もうひとつ気づかされる点は、朝鮮半島南部にみられる倭製青銅器が、北部九州系の遺物に限られていることである。なぜ祭器化した銅鐸がないのだろうか。

銅鐸の鉛原材料は朝鮮半島系から漢系、さらに漢系のなかでも画一的な材料へと変化する。その変化は武器形青銅器も連動している。大陸からもたらされた鉛を用いていることは確実で、それをインゴットではなく原料で入手して調合していた可能性が指摘されている（難波 2011）。もし近畿地方の銅鐸製作を掌握する集団が朝鮮半島南部に対し直接交渉していたのであれば、近畿一円で行っているのと同様に、あるいは北部九州が武器形青銅器を運んでいるように、銅鐸を韓に運んでいても良さそうなものである。北部九州勢力だけが韓に青銅器を移出し、近畿勢力はしなかった、しかし両者とも対外交渉を行っていた、という解釈は、列島内の青銅器分布と比べると不自然である。よって、対外交渉の窓口は一貫して北部九州が握っており、近畿からは間接的あるいは随伴的にしか朝鮮半島、漢との交渉を行えなかったのではないかと推測したい。鉛同位体比は近畿式銅鐸・三遠式銅鐸・広形銅矛に共通した画一的なものであること、すなわち列島にもたらされた同じ材料から铸造していることとも整合的であろう。

おわりに

弥生時代の武器形青銅器はその起源が朝鮮半島にある。日本において国産化された後は独自の発展をするが、武器形青銅器が非実用化する点は朝鮮半島とおなじである。朝貢を通じて獲得される文物が本来の使用法と切り離されて個別的に受容され、変質することも朝鮮半島南部と北部九州で同様の現象といえるだろう。反対に北部九州から韓の地へ運ばれた武器形青銅器も、倭人社会での使い方と切り離され、韓の地で副葬に供されている。首長層同士の交渉によって運ばれた贈り物の受容のしかたを知ることができる。

ひるがえってこの視点を日本列島内に適用すれば、北部九州には朝鮮半島から細形段階の銅矛・銅戈・銅剣が多数流入し、実用武器、副葬品として密接な交流のもとで比較的体系的な受容をされている。しかし中国四国地方や近畿地方といった東部地域では流入量が少なく、北部九州に先立って本来の使用法とは異なる埋納祭祀に供される。これは北部九州を介した間接的で僅少な朝鮮半島との交流によって、本来の体系から切り離された受容のしかたの一例として理解できる。武器だけでなく銅鐸も同様である。韓の地で武器とともに副葬されていた小銅鐸は、はじめは銅剣・銅戈を伴ったが、埋納祭祀に供され、やがて銅鐸だけが切り離されて、大型化の道をたどった。船載の朝鮮式小銅鐸がほとんど出土していないことから、船載品の流入量が極端に少なく、体系的な受容がなされなかったことを知ることができる。

武器形青銅器や銅鏡は物品そのものだけが搬入され、倭独自の使い方をする。国産化にあたって外観も大きく変化していくが、そのような変化は使い方が全く異なるから可能だったともいえる。対して飛鳥時代では物品だけでなく留学生や招聘した知識人によって体系的な受容を実現したことに特色があり、国産化にあたって意匠の取り込みや多少の形態変化は起こるが、使い方や形態があまり変化しない理由はそこにある。

本稿は型式学的研究というより、その前提あるいは背景となる事象への視点で紙幅を費やした。今後さらに研究を続けたい。

なお本稿は平成 25 年度 JSPS 科研費 24720367 の成果の一部も含んでいる。

参考文献

- 朝日新聞 2013「国内最古級の中国製陶器か 奈良・山田寺跡の三彩破片」(6月18日朝日新聞デジタル記事)
- 飛鳥資料館 2013『飛鳥・藤原京への道』
- 井上洋一 1993「銅鐸起源論と小銅鐸」『東京国立博物館紀要』28 東京国立博物館 1-95 頁
- 上田雄 2006『遣唐使全航海』草思社
- 近江俊秀 2012『道が語る古代史』朝日新聞出版
- 岡村秀典 1993「楽浪漢墓出土の鏡」『弥生人の見た楽浪文化』大阪府立弥生文化博物館 58-62 頁
- 岡村秀典 1995「楽浪出土鏡の諸問題」『考古学ジャーナル』392 15-20 頁
- 後藤直 2009「弥生時代の倭・韓交渉 倭製青銅器の韓への輸出」『国立歴史民俗博物館研究報告』151 307-340 頁
- 下條信行 1982「銅矛形祭器の生産と波及」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』595-623 頁
- 高倉洋彰 2002「弁韓・辰韓の銅鏡」『韓半島考古学論叢』すずさわ書店 235-284 頁
- 高久健二 2002「楽浪郡と三韓」『韓半島考古学論叢』すずさわ書店 249-280 頁
- 高久健二 1995「楽浪郡と三韓・三国文化」『考古学ジャーナル』392 21-26 頁
- 高久健二 2011「楽浪・帯方郡との関係」『弥生時代の考古学』4 同成社 39-53 頁
- 田中俊明 2011「文献からみた政治史」『弥生時代の考古学』4 同成社 88-103 頁
- 谷豊信 1995「楽浪郡の考古学・総説」『考古学ジャーナル』392 2-4 頁
- 玉田芳英 2012「坂田寺跡出土の三彩」『紀要 2012』奈良文化財研究所 78 頁
- 千田剛道 1995「獸脚硯にみる百済・新羅と日本」『文化財論叢Ⅱ』同朋社
- 難波洋三 2011「扁平鈕式以後の銅鐸」『大岩山銅鐸から見えてくるもの』滋賀県立安土城考古博物館 71-89 頁
- 西口 2012「初期施釉陶器の文様と産地—飛鳥地域出土の2例について—」『紀要 2012』奈良文化財研究所 76-77 頁
- 町田章 1988「三雲遺跡の金銅四葉座金具について」(石川日出志・小杉康編 2004『展望日本歴史3 原始社会』東京堂出版 371-377 頁収録)
- 宮里修 2010「朝鮮無文土器文化の青銅器副葬」『比較考古学の新天地』同成社 916-926 頁
- 森川実 2013「舶載の土器」『飛鳥・藤原京への道』飛鳥資料館 23-26 頁
- 安田龍太郎 2002「飛鳥藤原地域出土の新羅印花文土器」『文化財論叢Ⅲ』奈文研 171-181 頁

挿図出典

- 図1～3 森川 2013 図1～2より
- 図4～5 後藤直 2009 図1～2より
- 図6 井上洋一 1993 第16,22,39図より